

## 自動詞と他動詞

多くの動詞は自動詞・他動詞のペアがあります。

自動詞	他動詞
肉が焼ける	魚を焼く
電車が止まる	車を止める
お湯がわく	お湯をわかす
赤ちゃんが起きる	子供を起こす
木の葉が落ちる	財布を落とす
ワインが冷える	ビールを冷やす
パソコンが壊れる	おもちゃを壊す
靴ひもが切れる	豆腐を切る
ガラスが割れる	お皿を割る
電気が消える	ガスを消す
洗濯物が乾く	髪を乾かす

上記の表で示されるように、他動詞には「～を」で示される動作の対象があります。但し、下記のように「～を」があっても、自動詞の場合があります。

空を飛ぶ

橋を渡る

学校を卒業する

上記では「～を」の部分は、動作の行われる場所、通過点などを示します。

下記のようにペアになっていない動詞もあります。

自動詞のみ いる、ある、わかる

他動詞のみ 書く、置く、たたく、持つ、殺す

更に、自動詞、他動詞が同形のものがあります。「開(ひら)く」「閉じる」「終わる」などです。他にも「風が吹く」「笛を吹く」、「水が引く」「線を引く」、「ことが運ぶ」「荷物を運ぶ」のように、ちょっと意味は異なりますが、自動詞にも他動詞にもなる動詞があります。

自動詞、他動詞の性格をよく表す文の例として、「自動詞+ている」「他動詞+てある」があります。

例：ビールが冷えている。

ビールが冷やしてある。

自動詞（ビールが冷えている）の文が、単にビールが冷えている状態を表しているのに対

して、他動詞（ビールが冷やしてある）の文は、動作主の存在、意図を意識した文と言えます。つまり、「誰かが、何か理由があってビールを冷やした」ということになります。

これは、「お皿が割れました」という言い方が「お皿を割りました」に比べて、割った人の存在をより曖昧にしていることからわかります。逆に「お皿を割りました」の方は、割った人の存在を明確に表していると言えます。

### 「日本語総まとめ N2 語彙」の P.110

「迷惑をかける」「エンジンをかける」「橋をかける」は「かかる」に比べて、「誰が」を強く意識していることになります。

「(太陽に／山に、等) 雲がかかる」がごく普通の文であるのに対して、「雲をかける」という場合には、「風が雲をかけた」のように擬人化した行為者等が必要になります。結論として、「雲をかける」という言い方は間違いではないが、「使い方が難しい」または「あまり使われない」ということになります。